

(14) 蛍(ほたる) 鉱山跡

参考文献(1)を手引きにして、福島県会津若松市館岩村(現 南会津町)小高林の蛍鉱山跡を探索した。鉱山跡は参考文献(1)中の地図の印とほぼ一致した。登り口付近には1軒の民家があった。民家に向かって左側に、林道があり、左上方に延びている。ここを道路から数十m進むと、右手に今にも消えかかっている小さな登り道がある。先ほどの民家の裏手に回るような感じである。進んでいくと沢に沿って進むようになる。沢伝いに登って行けば、蛍鉱山跡まで行き着けるが、途中道が消えたり、現れたりしている。消えた場合には、沢を登ればよい。約40分ほどで、沢に針水晶がびっしり付いた石英の転石が目立つようになる。その当りで、沢の左手に花崗岩の転石や微少水晶を持った石英などの転石が沢まで結構たくさん落ちている箇所がある。ここが蛍鉱山のズリである(写真)。このズリを数十m直登すると、廃坑口が3つほど横並びにある。向かって左側の坑口(写真)は結構広く、奥が見通せるが、危ないので、奥には入らない方がよい。

この蛍鉱山の主要鉱物は参考文献には明記されていないが、鉱山名にも冠している蛍石が主要鉱物であったようである。このズリで、毛状水晶群、針状水晶群、細柱状水晶群、蛍石が採集できた。

参考文献(2)も参考にすると、蛍鉱山のある沢は「幽沢」らしい。国土地理院の地形図等からすると、この沢の南の沢は「鍋沢」、その南の沢は「大沢」。「福島県鉱山誌」には、これら3つの沢で採掘が行われていたそうである。時間があつたので、地形図を参照して、最初の登り口から林道に従って「鍋沢」に行った。林道を10分ほど登ったところ、林道の右手に、コンクリートの廃墟が数段に残っていた。鉱山施設跡と思われた。蛍鉱山跡へは登り口から約40分の登り。しからば、同じ程度の沢の上流に、ズリか坑口跡があるはず、と考えて、わずかな痕跡の残った細道と沢を登り詰めていった。が、その間には何の鉱山跡の形跡を見つけることはできなかった。沢に微少水晶などの欠片も見つけれなかった。下山して、先のコンクリートの廃墟に登ってみた。廃墟跡に石英、微水晶群の転石があることはあった。廃墟の最上部は平地に開けていた。どこから鉱石を持ってきたのだろうか? 廃墟の正面は林道を挟んで沢である。ズリを探してみたが、無い。完全に土壌で覆われてしまったのであろうか。時間がなかったので、大沢まではいけなかった。

参考文献(1)では、蛍鉱山跡は沢の右岸にあるとしている。しかし、沢を少し登った左岸の上部にも幾つかの坑口跡があった(写真)。そのうちの一つの坑口の上部岩盤には、石英+水晶+蛍石+雲母の数十cm厚の鉱脈が残っていた。立ち入り禁止の赤札がぶら下がっている当りである。露頭鉱脈である。越路鉱山と同じく、採取はほどほどにして、採るのは写真だけにしたい物である。



地図 国土地理院 2万5千分の1 地形図 「内川」

探査日 2009年4月、その他の日

参考文献

(1)「鉱物観察ガイド」、松原聡 編者、東海大学出版、2008年

(2) <http://mineralhunters.hp.infoseek.co.jp/hotaru.html>

鉾山跡写真

沢からズリを見る。上部の少し黒いところが坑口跡の一つ。落ち葉で一杯であるが、落ち葉を払うとズリが一杯である。



坑口の一つ。口が広いので、雨宿りに結構である。



沢の右岸上部にある坑口跡の一つ。入り口上部で石英＋蛍石の厚い露頭鉱脈を観察できる。

採集鉱物写真

品名	針水晶群、毛水晶群、細柱水晶群
化学組成	SiO_2
色	透明、白、各種（煙水晶、黒水晶、紫水晶、紅水晶）
光沢	ガラス
条痕	白
比重	2.7
硬度	7
結晶系	六方晶系
劈開	なし
共生鉱物	正長石、白雲母
解説	



細柱水晶群 大きさ10cm前後



針水晶群＋細柱水晶群 大きさ10cm前後

品名	蛍石
化学組成	CaF_2
色	基本的には無色であるが、普通は緑、紫、ピンクに色づいている。
光沢	ガラス
条痕	白
比重	3.2
硬度	4
結晶系	等軸晶系
劈開	4方向に完全
共生鉱物	石英、正長石、緑泥石
解説	(1) フッ素の原料。高級ガラスの原料。蛍石の融剤としての原料。 (2) 紫外線で蛍光を発する（が、実際には極一部である）。 採集品は蛍光を出す物と出さない物とがある。



蛍石の塊。大きさ約9cm。



大きさ15 cm位。真ん中から右に少し紫色の蛍石群。左には微少水晶群



左側に大きな、右側に小さな蛍石の単結晶群。 大きさ約10 cm。

(14) 福島県郡山の蛭鉦山跡(追記)

蛭鉦山の既報は、参考文献(1)、(2)を手引きにした、探査報告であった。鍋沢の探査も行ったが、コンクリート遺蹟だけを見つけたことを報告をしていた。今回、更に南に位置する大沢の探査を行い、坑口跡およびズリを見つけることができた。参考文献(2)の内容を確認した。参考文献(2)によれば、蛭鉦山の鉦脈は南北に伸びており、坑口は、幽沢だけではなく、鍋沢の北面、大沢の北面の3カ所あった。既報の探査報告での坑口は幽沢の坑口であった。そして、大沢の坑口跡をもつけることができた。これらの探査結果から、鍋沢の鉦脈の位置の見当をつけることができた。地形図上で、幽沢の坑口跡と、大沢の坑口跡に直線を引き、鍋沢の北面あたりに見当をつけて、探査を行った。結果、鍋沢にも、坑口跡およびズリを見つけることができた。鍋沢のコンクリートの鉦山遺蹟から、だいぶ西寄りのところであった。

現地への経路は次の通りである。東北道を仁科氏の塩原ICで降りる。400号線に入り西行して行く。上三依で120号線に入り北上していく。352号線と出会ったら、左折し、尾瀬方面に向かっていく。たのせ地区当たりに行き着くと、木賊温泉への案内板がある。それに従って、左折する。西根川に沿った村道を南下していくと、小高林地区に行き着く。蛭鉦山の追探査として、大沢の探査を先に行い、その結果、鉦山跡を確認した。その結果を基に、後日、鍋沢の探査を行ったので、その順序で紹介をする。

図1の小高林の所で、村道から西側の大沢への林道へと入って行く。が、民家が点在しており、入り口が少し分かり難いかもしれない。この付近に近づいたら、車を降りて、足で確かめるのも良いであろう。道に入ると、直ぐに古びた橋を渡ることになる。橋を渡った先で駐車できる。

探査日 2013年4月、その他

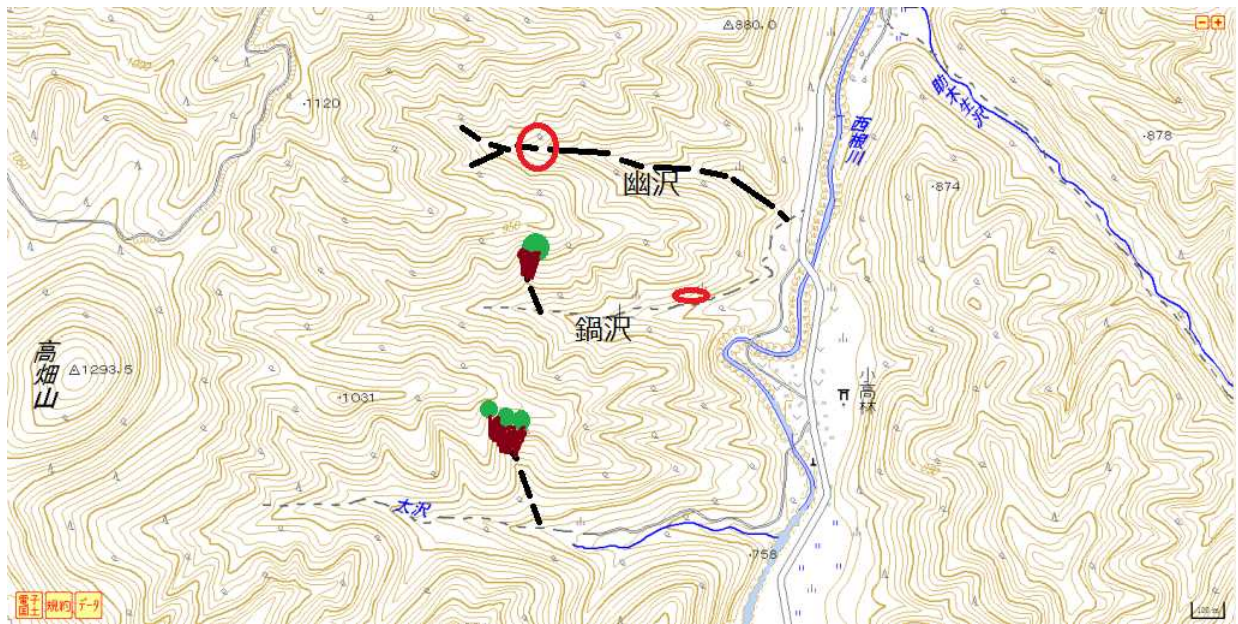


図1 国土地理院の地図サービスホームページより複写掲載。幽沢上流の赤丸は、既報の鉦山跡である。大沢の鉦山跡は、大沢沿いの林道に入ってから、最初の支流沢上流にあった。黒破線で経路を書き入れている。が、道らしい道はない。小さい沢を遡上する。途中から、沢には微小石英塊の転石が目立ってくる。黄緑丸が坑口跡、隣り合って3口あった。茶色ベタがズリである。鍋沢への入口の林道は、幽沢への入口ともなっている。主林道をそのまま進めば、鍋沢へと進むことになる。途中、コンクリートのホッパーが右手斜面に残っている。赤楕円の当たりである。更に進んだ先の、北向きの支流沢の上流に、坑口跡を1つ見つけた。山中では、どの小さい沢かわからなくなるであろう。以降に添付している写真を参考にすれば、それほど迷うことはないであろう。今回に限ったことではないが、登山者が利用する高度計付き時計を持参することを勧める。未知の所で、かつ道がはっきりしていない所をハイキングする場合には、非常に重宝な道具となる。数万円という値段なので決して安くはないが、回数を重ねれば、原価は十分に取れると思う。

鉾山跡写真

大沢



写真1 大沢沿いの林道を、小1時間歩くと、このあたりに行き着く。この先の右側斜面が、小さい支流沢となっている。北方向に伸びている。この支流沢を登る。特に道は無いが、容易に登っていける。途中から、微少水晶塊の転石が見られるようになる。



写真2 沢を登っていくと、右側斜面上部に岩が露出し、その下に坑口がある。坑口跡は少しつつ離れて、3カ所にあった。周り、および坑口の下斜面は、草木、土砂に覆われているが、ズリである。



写真3 ズリによく見られた微少水晶・針水晶塊。

鍋沢



写真4 鍋沢と幽沢への入口の林道は同じである。主林道は鍋沢に向かっていく。それを登って行く。途中右側に、林道に接して、コンクリート遺蹟がある。形状からすると、鉱石ホッパーと思われるが、採鉱量が多かった鉱山であったことをうかがわせる施設である。



写真5 鍋沢に沿って、山道を更に進んで行くと、このあたりに行き着く。この写真画面の右側斜面に小さな支流沢がある。この沢を登る。大沢の場合と同じく、道らしいものはない。小さい沢を遡上する。



写真6 沢を登って行く。右上上部に坑口跡を見つけた。ズリはなさそうに見えたが、坑口の下の方で、大きな古木が根ごと倒れ、根元の斜面が大きく掘えぐられていた。そこにはズリが現れていた。写真7参照。



写真7 古木の開けた穴で、表面観察のみで見つけた、大きめの幾つかの微少水晶塊。

採集鉱物写真

なし。幽沢以上のものなし。

参考文献

- (1)「鉱物観察ガイド」、松原 聡 編著、東海大学出版、2008年。
- (2)「福島鉱山誌山誌」、福島県、1964年。